108 十津川の吊橋

とつがわのつりばし

十津川村は紀伊半島の中央部、奈良県の一番南にあり、その面積は672km²、県の約5分の1を占める日本一広い村である。山また山が重なり谷は深く、日本の秘境といわれているが、歴史の節目にはその名が登場する。672年、大海人皇子（後の天武天皇）派と大友皇子（後の弘文天皇）派が皇位継承を争った壬申の乱に大海人皇子が一時難を避けたり、鎌倉幕府の末期、建武の中興の前、大塔宮護良親王が元弘の乱に際してこの地に難を避け（元弘3年秋―1333年）、明治維新を迎える前の激動のとき、文久3年（1863）8月の天誅組の挙兵に加わるなど、その他にも歴史は十津川村の名を折々に思い起こさせる。交通不便な秘境にありながら、十津川村の人々は中央勢力にうまく対応し、長い免租地の特権と平和な自治体制を守ってきた。

その真ん中を流れる十津川は、天川村山上ケ岳に源を発する天の川が大塔村阪本付近から十津川という名で呼ばれる新宮川水系（下流は熊野川とも呼ばれている）の本流である。そこには「いろは48橋」ともいわれるが、十津川村役場の橋の一覧地図では54の橋があげられており、そのうち延長100m以上の橋が12橋、50m以上が18橋ある。付近の町村にあるそれも数えれば、その数は3桁の数にのぼるであろう。

十津川は、戦後は吉野熊野総合開発によって発電用ダム、国道168号、林道が整備され、今でこそ奈良県五條から南下、和歌山県田辺市から富田川を東に上って熊野本宮を経る道、新宮市から北上するなど幾つかの観光ルートが開けてはいるが、今日でも秘境への旅の思いが人々を引き付けている。

数々の吊橋がいつ架けられたかを明らかにするのは難しい。明治半ばこの地に入った漢学者南岳は、すべて丸木橋と聞いていたが板橋もあるなどといっており、明治22年（1889）の大洪水の後、ぽつぽつと吊橋が架けられるようになったのかもしれない。

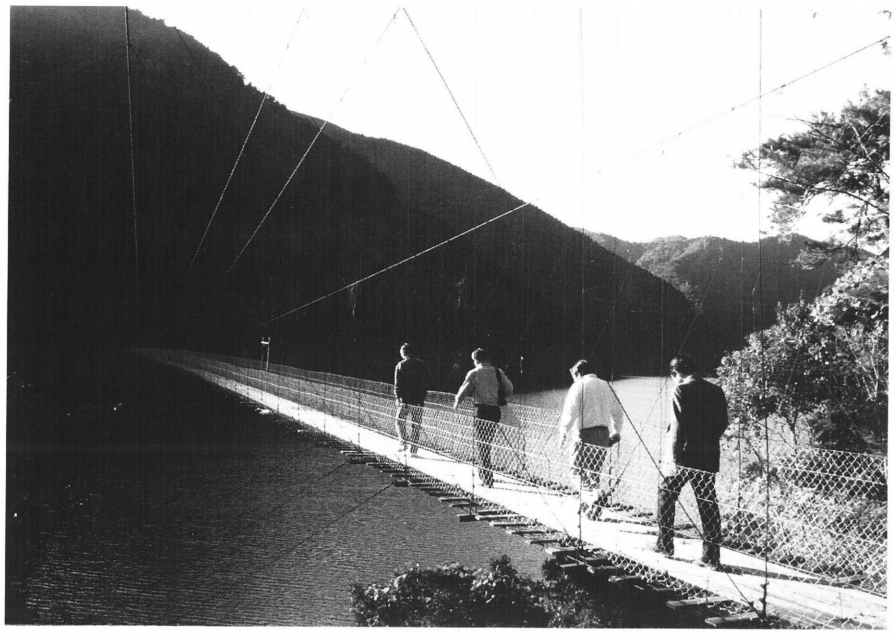
ほとんどの吊橋は、鉄線橋、針金橋といわれるくらいに主ケーブルも細く、細い針金の耐風索、さらに歩面を載せているケーブルからどのくらい有効かわからないが針金を岸に斜めに張ったりしている。この地域で最長の谷瀬大橋は径間297.4m、昭和29年（1954）に架けられた。始めはタワーがなかったが、47年にタワーを建てて主ケーブルを上側に追加するという改造がなされた。今見るとケーブルが2層になっためずらしい形に見える橋である。下の川原一帯はキャンプ場なども整備され、観光地化している。

昭和35年（1960）、電源開発のダム建設にともなって架け替えられた川津橋は、径間177.6m、逆三角形の補剛トラスを持った新しい形式である。元のこの橋の主ケーブルを真ん中でつないで架け替えに使った別の橋も、そのそばに見ることができる。

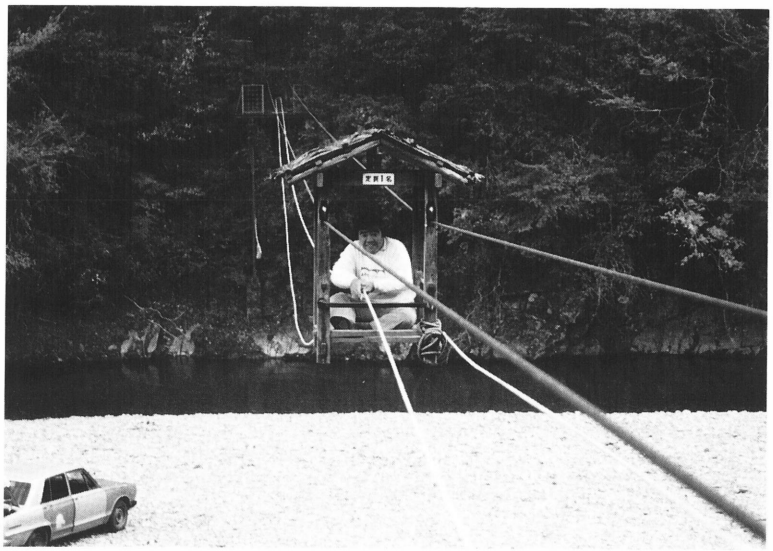
両岸に渡した索にぶら下がった籠に乗り、別の索を自分で手繰って渡る籠渡しは、昔の川渡りの一方法として知られるが、猿が蔓を伝って渡る姿になぞらえ野猿ともいい、ここでは観光施設の一つとして整えられている。

歴史と自然豊かなこの地域は、自然の中に似合う吊橋の数々を満喫できるところである。

〔TJ〕



二津野大橋（長さ193.2m）　〈1993年11月5日，撮影・共に田島二郎〉



十津川村の野猿

（1:25,000　十津川温泉）